

僕らのまちには生活感がない

「誰のものでもない場所」になりつつある僕らのまち。そこはなんとなく空虚な空気に包まれている。「誰のものでもない」ということは、「誰の生活の場にも成り得ていない」と言い換えられる。本来、まちというものはそこで生活する人々の行為や空間が時間的に積み重なってできたもののはずである。それなのにいつの間にか、僕らのまちはそこで生活していない「外側の人たち」の論理で組み

立てられるようになったようだ。そして、その「外側の人たち」によって与えられた屋外空間で僕らは毎日を過ごしている。そんな屋外空間で僕らが「自律的な行為」を行うことはとても難しい状況なのかもしれない。僕らのまちは洗練されたお洒落な空間が増えたにも関わらず、「生活感がない」、「居心地が良くない」と感じるのにはそんな理由があるようにも思う。

家島には《生活感》がある

僕らが家島（家島群島の中の家島本島）を訪れて驚いたことは、生活感がないものと思っていた屋外空間に生活感を感じ取ったことである。その理由の一つは、僕らが普段「家の中だけにいる」と思っていたものが「家の外にも存在している」ことにある。それらは意味もなく家の外にあるわけではなく、家島で生活する人々たちにとっての何らかの意味が見取れる。僕らが「家の中だけで使うもの」

を家島の人たちは屋外の時間を楽しく・便利に過ごすために「家の外でも使っている」ようなのだ。家島の屋外空間は「誰のものでもない場所」ではなく、明らかに「家島の人たちの場所」として存在している。だから僕らは家島を歩き回って「家の中のものが外にもある現象」をたくさんカメラに収めた。そして、その中から特徴的な10の《生活感》を選び出した。

家島で感じた10の《生活感》



椅子



以前は家の中で使われていたであろう椅子やソファを目にすることができる。陽だまりに置かれたこれらの椅子に腰掛けてくつろぐ島の人たちがいる。最近、椅子の数が増えているらしい。元気なお年寄りなど誰かとコミュニケーションを取りたい人が増えているようだ。

流し台・冷蔵庫



僕らにとって流し台や冷蔵庫は家の中にあるのが当たり前だ。しかし家島では玄関先や軒先にも置かれている。漁業の盛んな家島では、流し台や冷蔵庫は家の外にもあるほうが便利であるようだ。